

## シンポジウム

## 日本テニス学会と体育方法専門分科会

梅林 薫<sup>1)</sup>

日本テニス学会は、1989年10月に第1回日本テニス研究会という形で東京大学において開催された。研究と現場とを繋げるものが大きな目的であった。この時の演題数は5件、次回より会員制としてアナウンスされ、第2回テニス研究会では、会員数が228名となった。大学教員だけでなく、テニスクラブのコーチ、学校関係の教員など多くの方がこの会に賛同した。1994年、第6回から日本テニス学会 (Japan Society on Tennis Science) と名称が変更 (学術団体として登録) された。1996年9月学術研究団体として登録、2009年12月に那覇市 (沖縄県) で行なわれ、21回目が終了している。

学会の目的としては、『研究室と現場との情報交換』『研究成果の実用化』『国際交流』を図っていくことにある。テニスに関する科学的研究の発展に貢献しながら、より実践へとつなげていくということである。特にテニスでは、テニスクラブで指導するプロコーチが多く、効果的な指導法 (実践) とスポーツ科学 (研究) を結びつけるというこの学会の目的に期待する声が非常に多く見受けられた。

この学会の会員は、一般にテニス愛好家、選手、コーチ、教員、そして研究者などで構成されており、会員数は、最も多い時期である2000年には約650名と

なった。このような現場と研究を繋げる場が少なかったこともあり、このテニス学会の期待度が非常に高かったことが伺える。1994年に日本テニス学会として認知され、その後はこの学会の趣旨に沿って活動が推進されていくが、徐々に会員数も減少していく。現在は (2010年)、240名ほどになっている。(図1) このことは、学会の反省すべき点であり、内容的には、充実していくのであるが、学術的な内容が多く、それに対しての不満もあったのではと推察される。より現場のコーチが参加しやすい内容とすべきものであるとのことで、最近では運営委員を中心に工夫がなされてきている。

学会の主な活動としては、年1回の学会開催と学会誌 (テニスの科学 ; Japanese Journal of TENNIS SCIENCE) の刊行そしてプロジェクト研究の推進事業などである。学会大会については、シンポジウムそして一般発表 (口頭およびポスター) そしてオンコート発表があり、それぞれ活発な討論がなされており、中でもオンコート発表については、実際にコート上で実践を行いながらの独創的な発表 (指導方法など) となっている。図2は、学会の演題数の推移を示したものである。1989年には、5演題であったが、年々増え続け、1999年には、18演題であった。それ以後、演

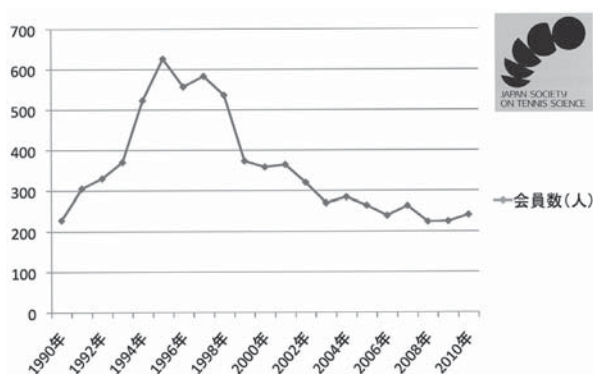


図1 日本テニス学会の会員数の推移

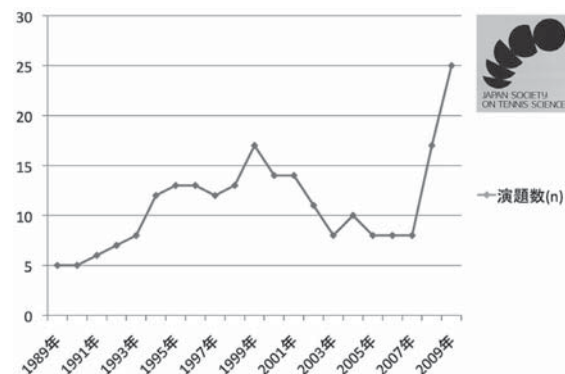


図2 日本テニス学会の演題数の推移

1) 日本テニス学会 / 大阪体育大学

題数は減少している。1999年あたりからの学会の体力の低下が始まったと言える。事務局、理事会体制を改変し、さらに内容の充実を図るとともに、積極的な啓蒙活動を行ないながら、2008、2009年と演題数も大幅に増えることとなった。

テニス学会でのシンポジウムのテーマについては、図3を参照していただければ、その内容が把握できる。内容的には、その年の最新テーマを中心にしており、テニス選手の養成システムやスポーツ医・科学、ジュニアの体力トレーニング法などが多いことが伺える。

また、一般テニス愛好家やジュニア選手を対象としたテニスレッスンなども行なわれ、講師には、元プロ選手や現役の大学や高校の監督（コーチ）が直接指導にあたっているところもこの学会の特徴と言えよう。研究成果を現場へ応用していくということで、開催地の地域へアナウンスを行い、指導者講習会（ジュニア、中高年者など）なども行なっている。これこそ、研究と実践指導の場を繋げる良い機会だと言える。また、会員同士の交流も兼ねて、テニス大会なども行っている。これも生涯スポーツ種目としてのテニスならではと言えよう。レベルも非常に高く、元プロ選手なども参加し、ダブルスがメインであるが、トーナメントなどを行い、盛り上がりを見せている。

今後の活動としては、日本のテニス界の動向ともリンクしていくことも必要であろう。

昨年、スポーツ立国戦略が発表された。（2010年8月）これを受けて、JTA（日本テニス協会）では、強化指導指針Ⅲを2010年度に策定する予定である。この指針の目標として大きく2つのことが挙げられている。

- ①テニス人口の増大、生涯スポーツ種目としてのテニスを普及していく。（テニス人口1000万人）
- ②世界で活躍できるトップ選手の育成（リオデジャネイロ・オリンピックで金メダルを獲得G-Projectの発表（2010年7月））

・テニス選手の養成システム	4題
・スポーツ医・科学	4題
・ジュニアのトレーニング法	4題
・メンタルトレーニング、思考力など	2題
・コーチング	2題
・世界へ向けての展望	2題
・テニス学会の展望	2題
・動作、バイオメカニクスなど	1題
・テニスの起源論	1題

図3 日本テニス学会でのシンポジウムのテーマ

そのためには、ジュニア選手の育成・強化が必要であり、またタレント発掘事業を推進していく必要がある。よって、テニス学会もこれらのJTAの目標に対してもいろいろな形で貢献できるように考えていくことも必要である。現在のJTAの強化本部ナショナルには、TSS（テクニカルサイエンス・サポート）チームが存在し、このメンバーについても、本学会の会員が多数を占めている。

今後の展開としては、次のような視点からの研究が必要となってくるであろう。

#### 《生涯スポーツとして》

- ・テニス人口1000万人の時代に備え、中高年者や女性のテニス指導法などの研究が必要。
- ・効果的なスキル上達法の開発（運動学、バイオメカニクスなど）。
- ・ケガ防止のためのスポーツ医学的研究
- ・心理学、体力学、社会学的研究

#### 《競技スポーツとして》

- ・ジュニア選手からトップ選手へのトレーニング法（スキルを中心として）
- ・競技選手のスポーツ医・科学的サポート
- ・テニス指導法を中心としたコーチング学の確立
- ・タレント発掘に関する研究
- ・疲労、痙攣対策などのスポーツ医学的研究

その意味でも、体育方法専門分科会とのコラボも必要になってくる。体育方法専門分科会への期待としては

1. テニス指導者（教育関係も含む）・研究者に役立つ実践の学としてのコーチング学構築へ向けた内容を多く取り上げてもらいたい。その意味でも、連携団体である日本コーチング学会との連携は、今後は大いに行なっていきたいと考えている。
2. 種目間連携を行なえるようなテーマ（共通課題）を設定し、意見交換のできる交流の場（シンポジウム）を多く作ってもらいたい。
3. タレント発掘、ジュニア育成に関する研究などの情報交換を積極的に行ないたい。

学会大会としては21回を重ね、今後は、この学会の趣旨である研究と現場をつなげた科学的研究の発展に寄与する形で進んでいきたいと考えている。この体育方法専門分科会においては、さらなる実践的なテニスの研究を披露するとともに、他種目との交流や情報交換を密に行いながら、そこから、テニスの実践科学へと発展していければという思いである。